
Butcher shop

砂塗心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B u t c h e r s h o p

【Nコード】

N 4 9 1 7 P

【作者名】

砂塗心

【あらすじ】

牛、豚、鶏、人間、解体はなんでもござれ。昼間は肉屋の店長で肉の解体。夜は人でなしの人間を解体。悪人にはあくまで残酷に、善人には情と幸せを！を信条に生きている男。しかし、善悪がはっきりしない世の中。苦悩する男。

1 解体

何か冷たく硬いところに背中があたり
目が覚めた

しかし何かで目隠しされ
手足も縛られているようだ
指先から足先まで力はいらない

どうなっているのかわからない

口にも猿ぐつわがされ、息がくるしい
助けを呼ぼうにも
わずかな唸り声しか出ない

鼻から吸った空気はなにか湿気ている気がする
それに血の匂いがかすかにする

自分は怪我をしているのか？

荒くなった息が整ってきた

耳が何か物音を聞いた

誰か側にいる

声にはならない助けを請いだ

足音が近づいてくるのがわかる

助かる・・・そう思った

足音が自分のすぐ側に止まり
耳にその誰かの吐息が聞こえる

「おまえは田中竜二だよな」

太くて低い声だった

急に怖くなった

こんなにも機械的な感情の無い声は聞いたことがなかった

「おまえは腐った人間だ

下っ端やくざのくせに

薬を使って何人もの若者を中毒にし

女と見れば薬漬けにし

やるだけやって

飽きたら売春をさせ

日本じゃ使いものにならなくなったたら

海外へ性交奴隷として売る

そんなことしていたら天国いけねーやな

こら

よく聞いとけよ

だからお前を天国へいかせてやろうと

こっちは善意でやってやるんだよ」

全身が震え、嫌な汗が出てきた

カチンっと何か金属が当たる音がした

すると喉仏に冷たいものを感じた

「はい、これで声でないから
見えるようにしてあげよう」

目隠しをはずされ
猿ぐつわも解かれた

そこには白衣の巨体がいた
マスクをし、眼鏡をかけ、タオルを頭に巻いていた

右手には大きなナイフが握られ
血が付いていた

猿ぐつわをとったにもかかわらず
口から息ができていない
喉のあたりからゴボゴボっと音がする
視界に血が噴き出すのが見えた

「おまえの体は、これから綺麗に解体し
臓器移植となって新しく生まれ変わるんだ
心臓、腎臓、肝臓、角膜なんてのは大人気だ
この血ももったいないな
献血しとかないと

お前の脳みそなんかは生ごみにしちまうかもな

残った肉は動物のに食べてもらう

ほら、昔チベツトあたりで鳥葬ってのがあっただろ

あれみたいにな

まあ鳥じゃなくて近所の動物園の肉食の熊あたりになるけどな

骨はきれいに粉にしてあげよう

それも動物園の鶏かもな

いい殻になればいいなあ」

腕に注射され血がどんどん抜かれているのが見える

叫び声はなにも出ない

空気が出る音だけだ

ナイフが赤く光りながら

また喉元へ滑り、へそのしたあたりまで冷たくなった

そして左わきから肋骨の下、右わきの下まで走る

そこから胸、右鎖骨左鎖骨、左わきへとなめらかに滑る

おもむろにくぎ抜きのようなものを鎖骨あたりに入れ押し込む

なにかが肩の根元あたりに入った

ゴリゴリつと地獄のような音がした

てこの原理で鎖骨が折れた音だった

その折れた鎖骨をその巨体が手でつかみあげた

メチッと肉の引き裂かれる音が

その隙間にもう片方の手を入れ

一気にひっぱり上げた

するとまたメチっという音を立てながら
毛皮のようにきれいにはがれた

自分の胸についていた筋肉と脂肪が
まるで鶏皮のようにひらひらとしている

生ゴミのように大きなバケツに投げ捨てられた

「まだお前は若いから、ちゃんと使えそうだな
心臓もきれいだぜ
やくざのくせにたばこも吸わねえからな
肺も使えるかもしれん」

そういうと股間にナイフが行った
しなびたそれを切り落とし
コンビ二袋に入れる

「おまえのこの大事なところは、雌豚にでも食わせるかな」

自分の体が切り刻まれて

胸の皮がはがされた時

気が狂った

だが失神させても

もらえなかった

薬で長く生かされるようになっていくからなのか
狂っていても自分が小肉片になっていくのを見ていた
目をつぶることもできない

腎臓、肝臓が切り取られ、冷凍の容器に入れられ、最後の心臓になったとき

やっと呼吸がとまった・・・

気が狂っているはずなのに

目の前が暗くなる寸前

本当に天国にいけるのだろうか・・・

そう思い

暗闇へと落ちて行った

「生き地獄を味わい、そしてまた地獄へ落ちるがよい」

そう呟きながら巨漢は心臓をクーラーボックスに入れ

頭にまいたタオルで血を拭い

携帯電話を取り出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4917p/>

Butcher shop

2010年12月14日08時05分発行